

万句の里俳句会

2月句会

万両の紅の重さよ家も古り 田中ひさ子
苗木市何も買はずにひと廻り 東 鈴子
日脚伸び用件一つ増えもして 稲田玲子
寒椿花の気構へ蕾にも 光本とよいち
悠々と堰落つ春の水音かな 小山照子
春の空動き始めし観覧車 田中美智
春時雨嫁に戴く御薄かな 吉井綾子
計の知らせありて真白の梅仰ぐ 丸山美代子
阿蘇五岳隠しきれずに春霞 岩木敬治
遠目にも早や咲き揃ふ梅の花 野中公枝
陶雛に旅の余韻や能登半島 打出 貞
東風の浜犬の足跡くつ跡 中路郁子

肥後狂句桜会

2月例会

十三夜 盗人家業は定休日 上村玲子
味食うて たんべんに買う宝くじ 小川繁美
味食うて 謎かけよらす袖の下 狩野本六
古火鉢 つこけた餅も食いよった 窪田明徳
人気者 引っ張りだこのコマーシャル 田中レイ子
お地蔵さん 道尋ねたら笑わした 田中孝幸

泗水短歌会

2月詠草

酒は御免 好きも命にや代えられん 高木房恵
ロザミ ボーナズ数えよらすばい 田尻港風
味食うて 違うとは口開けん餓鬼 高倉新米
仄かな期待 新チームには甲子園 辻 弘喜
派手好み 歳は不詳で言われとる 藤野清子
そらア無理 歌に合わせて呉れんなら 光堀善教
病院食三度三度に支配され涼しき脳裡に一首も成らず 福原美智子
三日月の凍てつく夜にする散歩あわれとみて 矢野悦子
か優しく照らす 枯葉マーク張るをためらい車駆る瞬時の危うさ肝に銘じて 高藤タツノ
雪雲の静かに来たる昨夜なるか今朝は真白の吾のふるさと 長尾はるみ
朝々に食む金柑の甘き味友の心もそえて味わう 中山定子
冬空はあくまで青く澄み渡る叩けばカーンと音の出そうな 平嶋きくえ

せせらぎ俳句会

2月例会

訪れる春も近きに郷はまだ菜の花咲かづ雨降りつづく 大島さと
目まぐるしく変わる温度にいたぶられまだまだ遠き春への思ひ 増田久美子
みはるかす霜の田の面は湯気の如今解けゆく深き朝露 吉安永子
紅梅に言葉かけたき日和かな 村山数恵
グランドゴルフボールを阻む霜柱 藤本邦浩
点滴の窓に紅梅ふくらみし 服部静子
何も彼も四温を当てに日延べかな 五丁義昭
架け大根日毎に似て来し我が皺に 藤本アツ子
山笑ふ江津の漣立ち初めて 内村泊虹
起き難き我れをせかせて鶴の声 寺本和子
ひともしの笛の元氣も春なれば (高1)渡辺大寿
鶉の鳴く声に送られ登校す (高1)渡辺一史

肥後狂句水笑会

2月例会

懇親会 美人のそばにでくる群 井手水光

天気予報 仕出し屋が顔しがめとる

神尾迫水

うっ散らかし 飯食たまんまはってとる

中島五女

うっ散らかし 嫁ごはどけかはってえた

柏原乗仏

ほっと一息 珍句のやつと出来上がり

平井江彩

ほっと一息 デイセンターへ送り出し

吉岡三水

天気予報 阿蘇の煙が教えよる

続 義昭

ほっと一息 お客した後気合いぬけ

御手洗三代

うっ散らかし 立って寝らなんごたる家

宮上美由

うっ散らかし 顔はほいっぴやねたくらす

山隈好茶

七城短歌会

2月詠草

畑を打つ余暇に歌詠む放映の百歳媪に我あくる 高木 精
昼支度延ばし見つむる日本の選手団入場にエールを送ると 池田カツ子

盲なる人の苦この頃量りある娘の住む丘の霞のつづき 木下陽子

マクヤの師何時にしなさる手作りとお白菜・ハ朔届けられ来し 水田紗陽子

凍てし庭蜜柑の葉先雪しづく朝日に映えてパールの如し 緒方寛子

窓越しに広がる海原カモメ一羽ゆるりとはばたき遠のくいづくへ 岩津涼子

病えてカーテンを引く氣力なく新聞探りて眩しき覆う 村上幾雄

白内障患う吾の視野以上庭木が霞む濃霧の朝 森 道子

朝の陽にさざ波光る川べりを散歩にいそいき 今日が始まる 松岡みちえ

福は内・鬼をも内で良しとする鬼にかりそめ良心あらば 下川 つぎ

旭志文芸俳句会

3月詠草

寄添ひて冬蒲公英の二輪咲き 中尾ヨシコ
板の間を寒行のごと拭き掃除 芹川のり子
蘭の花浮かす初湯や山の宿 水谷ミネ
初光天地の恵ただ祈る 東 芳子
阿蘇はるか炎越えたるどんど焼 芹川蓉子

里短歌会

2月詠草

立春の朝の光を返しつつ空を写せる桶の薄氷 山城雅子
茜雲空を流るる朝明けに逢ひたる吾の生きのよろこび 岡本トシ
寒気はや去りしと思ふ小春日に明朝の予報は マイナス五度と 安見朱實
腰痛に意のままならぬ厨ごとゆで過ぎし青菜 松本幾代
昼餉に添へむ オペを受けいまだ語れぬ姉の目の思い告げい 宮本淑子
わが畑に作りし野菜温き日に雑念払ひぎぶぎぶ洗ふ 川口敦子
数多なる事に囚われ生きる日々今宵の夫の寝息安らか 松岡節子
熱こめて不動岩の昔ばなし語りし母のこはふるさと 林 淑子
青春の明暗多く乗り越えて母となる娘の横顔 上田安代
きりり もみじ葉を握り寄り添い終わりゆく夫婦の愛 園田トミ子
は永久につづけり